

目次	Licht, Liebe, Leben	1
	1998年度「指定研究」研究組織一覧	2
	1998年度「一般研究」選考結果発表	3
	1998年度「一般研究」研究目的紹介	4
	1996年度「指定研究」研究経過報告	6
	1996年度「一般研究」研究結果概要	13
彙報	21	

# 研究所報

No.36

1998. 9. 30.

## Licht, Liebe, Leben.

真宗総合研究所所長 友田孝興

大谷大学に「真宗総合研究所」が付置されたのは1981年6月のことであった。建物にはその前年に閉寮になった「洗心学寮」（1961年の親鸞聖人七百回御遠忌記念として建設。1980年に学外に「貫練学寮」が新設されたのを機に閉寮）があてられた。その後、学内施設の整備にともない、1992年、学外の旧「育英学寮」跡に仮移転し今日に至っている。開学百周年の記念の年（2001）には、当研究所も学内に復帰し、開所二十周年を祝うことになる。このような記念の年を目前にした今、所長の任を了るにあたり、研究所について少しく感ずる所を述べてみたい。

初代の清沢満之学長は、「開校の辞」において、本学（当時は「真宗大学」と称す）を「浄土真宗の学場」と規定された。このことは「法」と「人」における宗派の閉鎖性を意味するのではなく、それとは全く逆の、開放性そのものの表現であった。と同時に、近代物質文明が惹起する精神の砂漠化を救うためには、社会内存在としての人間の本质とその生の軌跡を常に問い続けるところの、真を宗とする「学」と、願生浄土の「信」との総合が不可欠である、ということの公言でもあった。

この開学の理念に立って、「大学であることの本来の課題を果たす」ために、「大学が真に大学であるために、大学がより充実した大学と成るために」、つまりは、開学時の「真宗大学」という名を失った大谷大学が、常に自己のすべての学事の内容を、「真宗総合」ということの本義から厳しく問い続けるために、時の広瀬果学長は、当研究所を「真宗総合研究所」と命名されたのである。

かくして、当研究所は設置以来今日に至るまで、学長が代表を務める「指定研究」（特定研究と委託研究）と、公募による「一般研究」（共同研究と個人研究）とをもって、組織上の二本の柱としてきた。それは「真宗総合」の本義からして、「指定研究にしても一般研究にしても、平等に大谷大学の課題を担っている」からであった。そしてここでの研究が真の総合性を獲得するのは、教育の場への成果の還元においてであるがゆえに、他大学の研究所で見られるような、教育に関与しない研究所だけの専任研究員というものは論外であった。このような理念のもとに、当研究所は、これまで大学の使命と課題に誠実に応答すべく、最大限の

努力を重ねてきた。そして学界や社会に大谷大学としての貢献ができたことは、大学人全体の喜びとするところである。

しかし時代は急速に情報化・国際化へと突き進んでいる。遺伝子分野での情報操作は、難病からの救命のみならず、クローン人間をも産み出しかねないすさまじさである。産業・経済活動における国際化は、人々に物質的な豊かさを提供するが、同時に、大量生産・大量消費・大量廃棄の悪循環を断ち切ることを困難にし、国家間の貧富の差を益々増大させている。

このような大迷の社会状況下において、本学は、「光・愛・いのち」（Licht, Liebe, Leben. ヘルダーの墓碑銘でもある）をもって、大迷を照破する使命を、これまで以上に果たしていかなければならないであろう。そしてその中心的役割を担うのが研究所であることも論を俟たない。今ここでは、国際社会への仏教の解放発信のための様々な研究活動がなされている。近代教学の中心思想が、やがて英訳本を通して、世界の多くの人々の心に熱き精神の灯をともしことであろう。また来年（1999）の5月にドイツのマルブルク大学で本学と共同開催する「浄土真宗とプロテスタント神学」についてのシンポジウムに向けて、親鸞の精神を端的に表現する『唯信鈔文意』の独訳作業も急ピッチで進められている。更には『七祖聖教』の編纂や大谷大学近代百年史の研究等、質量ともに深遠多大な活動が展開されている。しかしその活動の大半が研究員（専任教員）と研究補助員（大学院生等）に負っていて、既にその能力の限界を超えているのが実情である。

そこで二十一世紀の大学に課せられた使命を十分に果たすためには、①研究員の極度の過重負担の軽減（サバティカル・リープの制度を早急に導入するか、嘱託の専任研究員を配置するか）、②情報化・国際化に即応するための研究員の留学制度の確立、③人材の養成と確保のための研究体制の整備、④国際交流の促進とそのための事務組織の改編充実、これらの事柄に早急に着手し、やがてできる「情報センター」（仮称）に、研究所は確かな内実を与えていかなければならないであろう。

共歩の友であった今は亡き安藤文雄前主事の遺徳を偲びつつ、研究所の益々の発展を念じたい。

# 1998(平成10)年度「指定研究」研究組織一覽

研究名	研究課題及び研究組織
特定研究 大谷大学近代史研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」 研究員 武田 武麿 (チーフ・教授) 宮崎 健司 (助教授) 寺林 脩 (助教授) 藤嶽 明信 (助教授) 友田 孝興 (所長・教授) 加来 雄之 (主事・助教授) 嘱託研究員 福島 栄寿 (光華女子大学真宗文化研究所職員) 研究補助員 御手洗隆明 (博士後期課程満期退学) 狭間 芳樹 (博士後期課程 2 回生) 藤枝 真 (博士後期課程 1 回生)
特定研究 国際仏教研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「諸外国における仏教研究の動向と展開の研究」 研究員 安富 信哉 (チーフ・教授) 箕浦 恵了 (教授) 宮下 晴輝 (助教授) 渡辺 啓真 (助教授) Robert F. Rhodes (助教授) 門脇 健 (助教授) 延塚 知道 (助教授) 鄭 早苗 (助教授) 樋口 章信 (専任講師) 木越 康 (専任講師) 友田 孝興 (所長・教授) 加来 雄之 (主事・助教授) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (特任教授) 大河内了義 (特任教授) 羽田 信生 (沼田仏教翻訳研究センター研究員) Alfred Bloom (ハワイ大学名誉教授) Jan Van Bragt (南山大学名誉教授・本学非常勤講師) Mark Blum (フロリダ アトランティック大学教授) 研究補助員 山本 和彦 (本学非常勤講師) 田村 晃徳 (博士後期課程 3 回生) 箕浦 暁雄 (博士後期課程 2 回生) 小川 直人 (博士後期課程 1 回生)
特定研究 蓮如研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「現代における真宗の再興」 研究員 鍵主 良敬 (チーフ・教授) 神戸 和麿 (教授) 大内 文雄 (教授) 一楽 真 (専任講師) 友田 孝興 (所長・教授) 加来 雄之 (主事・助教授) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (特任教授) 三木 彰円 (助手) 研究補助員 山田 恵文 (博士後期課程 3 回生) 鶴見 晃 (博士後期課程 2 回生) 橋田 尊光 (博士後期課程 1 回生)
委託研究 真宗史料研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「『園林文庫』目録データベース作成のための史料調査」 研究員 木場 明志 (チーフ・教授) 名畑 崇 (教授) 大桑 斉 (教授) 草野 顕之 (助教授) 嘱託研究員 西田 真因 (真宗大谷派教学研究研究所所長) 研究補助員 武田 朋宏 (博士後期課程満期退学) 富田 英見 (博士後期課程 1 回生)
委託研究 西藏文献研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究」 研究員 片野 道雄 (チーフ・教授) 小川 一乗 (教授) 小谷信千代 (教授) 白館 戒雲 (教授) 兵藤 一夫 (助教授) 嘱託研究員 今枝 由郎 (フランス国立科学研究センター主任研究員・本学非常勤講師) 福田 洋一 (東洋文庫研究員) 研究補助員 Steven Hartwell (Multiscrypt Solutions International, Paris・プログラマー) 三宅伸一郎 (博士後期課程 3 回生) 櫻井 智浩 (博士後期課程 2 回生) 広浜 哲生 (博士後期課程 2 回生)
委託研究 大蔵経学術用語研究  代表者 学長・訓覇 晔雄	研究課題 「『大正新脩大蔵経』経疏部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 一色 順心 (チーフ・助教授) 古田 和弘 (教授) 木村 宣彰 (教授) 織田 顕祐 (専任講師) 研究補助員 長沢 円 (博士後期課程満期退学) 采肇 晃 (博士後期課程 3 回生)

## 1998(平成10)年度「一般研究」選考結果発表

## (A) 共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
小野 蓮明	研究課題 「清沢満之の研究—清沢満之全集編纂のための研究—」 研究員 小野 蓮明 (教授) 樋口 章信 (専任講師) 一楽 真 (専任講師) 木越 康 (専任講師) 研究補助員 名畑直日児 (博士後期課程3回生)	140万円
加来 雄之	研究課題 「初期無量寿経の典籍・思想研究」 研究員 加来 雄之 (助教授) 古田 和弘 (教授) 宮下 晴輝 (助教授)	140万円
大内 文雄	研究課題 「唐代仏教石刻文の研究」 研究員 大内 文雄 (教授) 竺沙 雅章 (教授) 河内 昭円 (教授) 若槻 俊秀 (教授) 浅見直一郎 (助教授) 佐藤 義寛 (助教授) 山野 俊郎 (専任講師) 織田 顕祐 (専任講師) 浦山あゆみ (専任講師) 嘱託研究員 西尾 賢隆 (花園大学教授・本学非常勤講師) 今場 正美 (本学非常勤講師) 松浦 典弘 (本学非常勤講師) 研究補助員 福井 敏 (博士後期課程3回生)	140万円

## (B) 個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
鄭 早苗	研究課題 「韓国の龍に関する研究—歴史性と民俗性について—」 研究員 鄭 早苗 (助教授)	80万円

# 1998(平成10)年度「一般研究」研究目的紹介

## 共同研究

### 清沢満之の研究 —清沢満之全集 編纂のための研究—

研究代表者 小野 蓮明  
(真宗学)

本研究の目的は、本学の学祖である清沢満之の全集を編集していくことにある。これまでの清沢研究の基本資料であった『清沢満之全集』全8巻(法蔵館刊)が絶版となっている今日、研究に耐えうる全集の刊行には、内外からの強い要請がある。しかしながら、これまで真宗学科を中心として進められてきた調査研究によって、既刊の全集(3巻本、6巻本、8巻本)に校訂を加えるだけでは、研究の基本資料として十分に応答できないことが指摘されている。従って、満之自筆原本との対校などを経た、全く新しい全集の刊行が望まれることである。このため本研究においては自筆原本の確認および未公表・未整理資料の調査と整理を進めると共に、全集刊行のための作業を行ってきた。その中で、国際化という時代に対応していくためにも、電子情報として公刊することが不可欠であるということ、また清沢自身の文章を載せる本文篇と解説を含めた資料を載せる資料篇とに分けて編集する必要があることなどを確認してきている。2年目となる本年度は、全集の基本構想を決定し、対校を終えた資料から順に原稿化の作業を進めていく。また、満之の未公表資料の調査については継続してフィールドワークを行い、資料の収集整理に努める。具体的には下記の2点を柱としていく予定である。①全集編纂の研究 a全集の基本構想案の作成 b電子出版に関する研究 ②資料の調査研究 a西方寺を中心とする資料の調査および整理 b資料の対校。特に②のaでは、97年度からの西方寺における調査で、二千冊以上にのぼる同寺蔵書の整理を終えた。今後、数種類発見された満之の蔵書印等を検討しながら、同寺蔵書から満之自身の蔵書を確定していく必要がある。満之蔵書には、満之自身によるものと考えられる、書き込み等も多く見られる。より充実した全集の刊行に向けて、これらの整理・目録化も進めていく必要があると考えられる。

## 共同研究

### 初期無量寿経の典籍・ 思想研究

研究代表者 加来 雄之  
(真宗学)

本研究は、浄土教の伝統において「初期無量寿経」がもった意義を明らかにすることにある。大きく二つの側面から研究がなされる。一つは典籍研究であり、もう一つは思想研究である。とくに、これまでの多くの研究が、文献学的な関心からの研究のみにとどまっており、その浄土教の形成における影響の重要性が指摘されていながら、中国・朝鮮・日本における浄土思想への影響を踏まえての研究が少なかった。また初期無量寿経についての基礎的な研究解説書がないことは、研究者や学生がこれらの初期無量寿経を通して浄土教のもっとも素朴な形態を研究する上で障害になっているように思われる。このようなことから、平成九年度において、初期無量寿経である二本「大阿弥陀経(仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経)」と「仏説無量清浄平等覚経」をテキスト形式でデータベース化し、他本との校訂を終えつつある。また月一度のペースで研究員による研究会を行い、『大阿弥陀経』上巻の解説をほぼ終え、問題点などを抽出しながら注釈を作成しつつある。今年度は、前年度の解説の研究会を継続しておこないながら、従来の書き下しでははっきりしないところや、読解の上での問題点を整理しつつ、あらたに「平等覚経」との比較研究を行う。また最終的に研究成果として『大阿弥陀経』の解説テキストと解説を付した原稿を作成したい。それは、仏教受容期の浄土教を十分に配慮し、かつ以後の思想展開にも留意して読解されたものとなる予定である。具体的には、書き下し、語註、現代語訳などが付されたテキストとなろう。また思想研究については、ならびに初期無量寿経が中国・朝鮮・日本における浄土教の受容において、とくに魏訳『仏説無量寿経』の解釈においてどのような影響をもったのかについて研究を重ねたい。

## 共同研究

## 唐代仏教石刻文の研究

研究代表者 大内 文雄  
(東洋史)

中国における石刻資料は、先秦時代以来、実に膨大な数量にのぼる。その中で、仏教に関わる石刻文の占める割合には、とりわけ南北朝時代以降において非常に大きなものがあり、本年度の研究課題として掲げた唐代の仏教石刻文もその例にもれない。碑刻の歴史の中で、唐代は一つの頂点を形成する。そこで重要な役割を果たしている仏教石刻文は、また唐代社会の実態を知る上での第一次資料としての価値を持つものばかりであり、更に仏教史上の名品としてだけでなく、書道史上の名蹟も数多く含んでいる。しかし一方で、今世紀半ば以降における新出資料はもとよりのこと、伝世の著名碑刻ですら精密に解説された例は少ない。また唐代仏教石刻文の特性、全体像を把握する試みも左程に進展しているとは言いがたい。こうした研究の現状に鑑み、本研究においては、先ず石刻資料の解説作業をその中心に据え、作業の進展の中でそれぞれの石刻資料の特性を考え、全貌把握への端緒をなして行きたいと思っている。仏教石刻文の一つ一つには、それぞれが背景として持つ時代性—政治・制度や、地域・社会等の特性があり、更に宗教・思想史研究に提供し得る多様な内容が包含されている。また、今回対象とする仏教石刻文は、原則として石刻が現存するものの拓本、或いはその写真を資料として用いる。これらを読み解いて行くために、幸いに本学の内外より、史学・文学、そして仏教学の分野から専門研究者の協力を仰ぐことができ、従来の金石学・考証学・文献学的手法を取りながら、一研究者の専門分野にもとづく研究努力では到底なし得ない、幅広い討議のもとでの詳細な注釈・解説の作業を進め得る研究組織がまとめられることとなった。このような個人的専門性を越えた共同研究には、継続性が何よりも求められる。毎週の解説作業の中でそれは果たされると思われるが、更に研究会が不断に継続されることによって、新しい知見がその都度もたらされるであろうことを期待している。なお、今年度前期は比較的短い塔銘に解説対象の焦点を絞り、後期には唐代中国仏教史上に重要な位置を占める碑文に歩を進めて行く計画である。

## 個人研究

 韓国の龍に関する研究  
—歴史性と民族性について—

研究代表者 鄭 早苗  
(古代韓国・朝鮮史)

龍とは何か、という問題は長い間人々を悩ませてきたし、また今後も民俗学や社会学、固有信仰や仏教との関係等、議論になるテーマである。龍に関しては日本でもプロ野球団の名前から刺青の図柄など親しまれたり関心をもたれたりしているが、龍の研究となるとあまり関心はもたれないようであるが、荒川鉦氏の『龍の起源』(紀伊國屋書店)のように古今東西にわたって調べられている書物もある。朝鮮でも地名、人名に龍が多く登場するだけでなく、固有信仰に多く龍が登場し、仏教と関わる龍の印象も強い。また古代朝鮮の新羅の建国神話には龍が重要な役割を果たしているが、農耕と関わりながら、王権の強化に助力する姿で現れる場合もある。黄河の神であった河伯が龍であり、その河伯が高句麗の始祖・朱蒙の母の父であり、十世紀に建国した高麗王朝の始祖・王建の祖母は、東海にある龍宮に住む龍であることになっている。新羅、高句麗、百濟(百濟の始祖は高句麗と同じ)の三国と、その後の高麗はいずれも始祖の母系を龍にもとめるという共通性がある。この共通性が何に基づくものなのか、あるいは各国は共通する思想から龍を母性にしたのか、あるいは全く関連なく各国で形成されてきた建国神話に龍が登場する結果になったのか否かは興味あるテーマのひとつである。また王権とは直接的には関係しないだろうと考えられるが、壁画古墳に描かれた四神のことに触れてみたい。高句麗壁画古墳と多くの共通性をもつ高松塚古墳とキトラ古墳の四神の青龍が、古代の交流とどのように関わるのかも調べてみたい課題である。民間伝承にも朝鮮では龍が多く登場する。そして龍に対する信仰も多く見られ、地方の固有信仰と巫女に龍が関わってきた形態も研究課題にする予定である。現在は断片的な資料から、断片的な予測しかしえない状況であるが、思想史的な側面と民俗的な諸要素から朝鮮の龍に関する過去と現状を研究することを目的にしている。

# 1996(平成8)年度「指定研究」研究経過報告

## 特定研究

### 大学史編纂研究

#### —近代における大谷大学の 成立と展開の研究—

研究員・チーフ 武田 武麿  
(宗教学)

本研究は、大谷大学史編纂を目的として各年度ごとに中心課題をもって調査研究を行い、大学史の完成を目指している。

本年度は昭和期の調査研究に入った。それと並行して、前年度作成したパンフレット「大谷大学の100年」をよりビジュアルに表現するために図録写真集「大谷大学近代100年のあゆみ」の編纂を計画した。パンフレットは大谷大学近代100年の概略史であったが、図録写真集はそれを基礎として写真や史料によって表現しようとするものである。

会議および研究を下記のように行った。

#### 1996年

- 第1回 5月8日(水)午後6時 於大学史編纂研究室  
本年度研究計画の打ち合わせ  
図録写真集の内容の検討
- 第2回 5月16日(水)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の掲載資料蒐集の方法を検討し、同窓会へ呼び掛けることを決定
- 第3回 5月24日(金)午後7時半 於大学史編纂研究室  
図録写真集の編纂作業日程の確認および編集方針の検討
- 第4回 6月3日(月)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料の蒐集および整理体制の検討
- 第5回 6月12日(水)午後6時半 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料蒐集を同窓会に呼び掛けることを検討し、あわせて呼び掛けパンフレット作成を検討
- 第6回 6月24日(月)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料蒐集計画および受入方法の検討、呼び掛けパンフレットの内容の最終検討
- 第7回 7月8日(月)午後6時 於大学史編纂研究室  
呼び掛けパンフレット校正および学内資料の整理方法の検討

研究所紀要の報告者を選定

- 第8回 7月18日(水)午後6時 於大学史編纂研究室  
資料の受入体制の検討および学内資料の整理方法の検討
  - 第9回 7月26日(金)午後12時10分 於大学史編纂研究室  
資料蒐集を名誉教授に呼び掛けることを検討し、各研究員が分担して問い合わせることを確認
  - 第10回 8月1日(水)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料蒐集方法の検討  
大正期大学史の項目と資料の検討
  - 第11回 10月1日(火)午後6時 於大学史編纂研究室  
受入資料および学内資料の蒐集状況の報告
  - 第12回 10月11日(金)午前9時 於図書館  
図書館所蔵未整理資料の調査
  - 第13回 10月18日(金)午前9時 於図書館  
図書館所蔵未整理資料の調査
  - 第14回 10月18日(金)午前10時 於博綜館小会議室3  
受入資料の整理状況の報告
  - 第15回 11月1日(金)午後6時 於大学史編纂研究室  
図書館所蔵未整理資料の調査報告  
図録写真集の編集計画を検討し、昨年度作成のパンフレット「大谷大学の100年」を基準にしていくことを確認
  - 第16回 11月12日(火)午後6時 於大学史編纂研究室  
資料整理状況の報告  
図録写真集の編集計画を検討
  - 第17回 12月3日(火)午後6時 於大学史編纂研究室  
学内資料の整理状況の報告および受入資料の返却方法の検討
  - 第18回 12月10日(火)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料検討の分担および編集計画の検討
  - 第19回 12月18日(水)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の資料検討の分担および編集計画の検討
- #### 1997年
- 第20回 1月6日(月)午後1時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の原稿の検討
  - 第21回 1月17日(金)午後6時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の掲載資料の一次検討(学寮創設～)
  - 第22回 2月12日(水)午後3時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の出版計画の報告  
図録写真集の掲載資料の一次検討(開校の辞～)
  - 第23回 2月19日(水)午後1時 於大学史編纂研究室  
図録写真集の掲載資料の一次検討(閉校と移転～)
  - 第24回 2月27日(水)午後1時 於大学史編纂研究室

- 図録写真集の掲載資料の一次検討(総合化の試み～)  
 第25回 3月3日(月)午後1時 於大学史編纂研究室  
 図録写真集の掲載資料の検討(各研究員分担分)  
 第26回 3月11日(火)午後1時 於大学史編纂研究室  
 図録写真集の掲載資料の各研究員分担分の検討報告  
 第27回 3月13日(木)午後1時 於大学史編纂研究室  
 図録写真集の出版工程の報告  
 図録写真集の掲載資料の二次検討(学寮創設～)  
 第28回 3月19日(水)午後1時 於大学史編纂研究室  
 図録写真集の掲載資料の二次検討(開校の辞)  
 第29回 3月27日(木)午後4時 於大学史編纂研究室  
 図録写真集の掲載資料の二次検討(開校の辞～)  
 1996年度の作業経過の確認および次年度研究計画の  
 検討

上記のほか全国大学史資料協議会などの学会参加および資料調査を適宜実施した。

以上、1996年度は当初掲げた研究計画のうち図録写真集の作成が主な仕事となったが、次年度にはその完成にむけて当面全力を尽くすことを確認した。一方、図録写真集作成のための資料蒐集作業は、同窓生および図書館ほかから多くの貴重な資料・写真を蒐集することができ、極めて大きな成果となった。また今後の大学史編纂に重要な資料として活かされていくものと考える。

## 特定研究

# 国際仏教研究 —諸外国における仏教研究 の動向と展開の研究—

研究員・チーフ 安富 信哉  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教研究の動向を把握することと、仏教研究、ことに浄土教研究の成果を国際社会に発信することを目的とする。今日、国際化された社会において、浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まってきており、内実のある紹介が要求されていることは周知の通りである。そのような要求に応えることは親鸞を宗祖とする大谷大学の責務であると信じる。このような課題に、本研究班は、受信と発信という二つの側面から応えていきたいと思っている。まず受信においては、従来の研究を受け継ぎ、海外における仏教研究の動

向の把握と学内における共有を研究課題とする。また受信については、海外仏教研究のデータベースの公開と近代における親鸞の思想研究の海外への紹介という研究課題をもってそれに応えていきたい。とくに本年度は、研究初年度ということもあり、「発信」を実現していくための具体的方法と今後の計画について検討を重ねた。具体的には、この所報にも掲載されているように海外に仏教を紹介するという重要な仕事をしておられる研究者を招いて研究会を重ね、これらの意見も参考にしながら、さまざまな発信のあり方を模索した。その結果、「近代真宗教学アンソロジー(仮称)」を作成することを研究課題の「発信」における大きな柱とし、その目的、研究方法、課題などについて以下のような「覚書」にまとめた。また、あわせて従来の国際仏教研究班の三つの基礎研究も継続して行った。(1)海外の研究者を招いての研究会。(2)海外の学会への研究員の派遣、これについては所報No.35に報告済みである。(3)欧文の仏教関係典籍ならびに論文のデータベース化。

以下、「覚書」の要旨を報告することで当該年度の研究経過報告とした。

「近代真宗教学アンソロジー作成についての覚書」(要旨)

### 1、コンセプト

- a 目的：近代真宗教学思想の紹介 近代教学者の紹介  
真宗の公開

欧米に知られていない近代の大谷派の真宗教学思想を翻訳することによって、近代において親鸞の思想がどのように解釈されたかについて欧米に紹介する。具体的には、清沢満之、曾我量深、金子大栄、安田理深の重要な論考を何点か選んで、翻訳することを中心にする。また、教学思想の紹介を第一の目的とするが、世界に向けて真宗を公開するという使命も担っていきたい。つまり、学術的な側面から開教を支援するような意味をもつ紹介をしたい。

- b 基調：統一性 メッセージ性 インパクト性

個々の教学者の紹介もしくは論考の翻訳ではなく、全体として統一のとれた内容を目指す。その場合、真の意味での「発信」を目指すため、近代教学の解釈をとおした親鸞に立って、現代へあるいは欧米にメッセージ性をもったアンソロジーを作成する。欧米人が読んで、真宗についての知識を得るだけでなく、彼らの問題関心を喚起するような真宗の紹介を目指す。

- c 対象

出版の対象として、欧米の哲学者、宗教学者、仏教学

者、神学者を想定し、学術書としてのレベルの高いアカデミックなものを作成する。さらに、欧米の学生も考慮し、テキストブックとして使えるよう配慮する。

d 体裁

西洋へのはじめての近代教学のまとまった紹介となるので、まず近代教学者の重要な論考のアンソロジーの作成を考える。

2、内容

a 各論文の選考の基準

上記の目的を実現するために、4人の教学者の論文を以下の三点に留意して選考する。

(1)各教学者の思想テーマを代表するもの、(2)年代的に重ならないもの、(3)欧米人の関心に沿うもの、つまり社会問題との関わりがあり、日本の歴史、精神史、教学史とのコンテキストが見え、欧米の宗教的、思想的状況との結切点が見えるものを選ぶ。

b 翻訳の原則

嘱託研究員、客員研究員と国際仏教研究班研究員との相互の学術的な厳しい検討を通しながら翻訳作業を行っていく。また翻訳担当者を中心とした研究会をもち、訳語と注などを確定していく。

c 本文以外の紹介記事

(1)近代真宗教学概説、(2)解題…それぞれの教学者の「人と思想」、(3)グロッサリー、アペンディクス、年表など

3、翻訳すべき近代の真宗教学者とその教学テーマならびに論文

a 清沢満之 (1863-1903)

テーマ：宗教観、信仰的実存

論文(案)：「宗教哲学骸骨」(1892)、「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」(1903)、「わが信念」(1903)

b 曾我量深 (1875-1971)

テーマ：主体性論、宿業論、歴史観

論文(案)：「地上の教主—法蔵菩薩出現の意義」(1913)、「『歎異抄』聴記」(1947)「親鸞の仏教史観」(1935)、「真宗大綱」(1962-65)

c 金子大栄 (1881-1976)

テーマ：学問論、浄土観

論文(案)：「真宗学序説」(1923)、「彼岸の世界」(1925)、「『教行信証』の研究」(1956)

d 安田理深 (1900-1982)

テーマ：名号論、僧伽論

論文(案)：「名は単に名にあらず」(1960)、「根本願

根本言」(1972)、「危機の三宝」(1955)

4、研究予定

1997年度

(1)曾我量深の「地上の教主」「親鸞の仏教史観」の翻訳に着手。

(2)安田理深の「名は単に名にあらず」の翻訳に着手。

(3)清沢満之の「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」の翻訳に着手。

1998年度

(1)曾我量深についての翻訳・解説・附録などの完成。

(2)清沢満之の翻訳・解説・附録などの完成。

(1)海外の研究者を招いての研究会

■ 5月23日(火)午後5時

The Unique Potential of Shin Buddhism in Western Society

ハワイ大学名誉教授 アルフレッド・ブルーム教授

■ 6月27日(木)午後6時

The Rise of Christianity by Rodney Stark and Its Implication of the Spread of Jodo Shinshu

フロリダ アトランティック大学 マーク・ブラム教授

■ 6月28日(金)4時

欧米における真宗の未来像

沼田仏教翻訳研究センター 羽田信生氏

■ 7月22日(月)4時

アメリカにおける日本仏教研究の状況

デュポワ大学 ポール・ワット教授

■ 11月15日(金)午後6時

Shinshu Thought as a Challenge to Traditional Western Patterns

本学客員研究員 フォルカー・ツォッツ氏

■ 12月6日(金)午後6時

北米開教の現状と課題

広住剛氏

■ 1月14日(金)午後5時

国際的な視野から見た近代真宗学、または教学者の意義  
南山大学名誉教授 ヤン・ヴァン・ブラフト教授

(2)海外の学会への研究員の派遣

■ 1996年度国際真宗学会(ヨーロッパ部会)参加ならびにヨーロッパ宗教事情視察、資料収集

デュッセルドルフ(ドイツ)・パリ(フランス)・ウィーン(オーストリア)・ローマ(イタリア)

期間 1996年8月3日(土)~8月16日(金)

出張者 友田孝興 教授 本研究班 研究員(所長)

樋口幸信 専任講師 本研究班 研究員

■ Institute of Buddhist Studies Center for Contemporary Shin Buddhist Studies Symposium の参加および資料収集



出張先 アメリカ合衆国 カリフォルニア州パークレー  
 期間 1996年9月10日(月)～9月17日(火)  
 出張者 加来雄之専任講師 本研究班 研究員

■1996 AAR (AMERICAN ACADEMY OF RELIGION ANNUAL MEETING) の参加と資料収集・調査研究

出張先 アメリカ合衆国 ルイジアナ州ニューオーリンズ  
 期間 1996年11月21日(木)～11月27日(水)  
 出張者 安富信哉 教授 本研究班 研究員(チーフ)

(3) 欧文の仏教関係典籍ならびに論文のデータベース化

## 特定研究

### 蓮如研究

#### —現代における真宗の再興—

研究代表者 鍵主 良敬  
 (仏教学)

来(1998)年、いよいよ蓮如上人五百回忌の御遠忌を迎えることになった。大谷大学では、この御遠忌の記念事業として、真宗総合研究所における特定研究が企画された。現在11名の研究員と3名の研究補助員によって、研究が鋭意推進されている。

この「蓮如研究」は、(1)「蓮如」にかんする論文集の刊行、(2)『御一代記聞書』に対する現代的視点からの解説書の作成、(3)定本『七祖聖教』の編集の3事業から成るプロジェクトであるが、この3つのプロジェクトの目的と方針、現在の作業状況について簡単に紹介・報告しておきたい。

(1)論文集については、親鸞の「浄土真宗」の教学を蓮如がどのように個性化したのか。親鸞に直結する部分を念頭に置きながら、展開された意図を掘り起こす。蓮如の教学の表明は、『御文』が中心であるが、そこに示される真宗理解は、『歎異抄』や『安心決定鈔』乃至は覚如、存覚の真宗理解に多くの教示を得ている。そのような蓮如の思想を、現代的課題を視野に入れながら、教学のみならず歴史学・社会学等の幅広い視点から解明する。したがって、論文の執筆者は、真宗学・仏教学だけではなく、他学科および学外にまでその範囲を広げて依頼した。現在、専門性を視野に入れた調整をして、特に大谷大学

独自の論集という性格を浮き彫りにすることを目標に編集作業にあっている。

(2)『御一代記聞書』解説書については、蓮如上人の人間像がうかびあがってくるように心がけ、その教化と真宗を生きる姿を解明する。室町期当時の大衆の課題に応答した教化者としての生き様が、現代に即応した表現をとればどうなるか等の視点から解説する。この作業を通じて、『御一代記聞書』を見直し、宗門の教化事業の一助となるように努める。現在、『御一代記聞書』の条文をその内容にしたがって区分し、テーマ別に抄出して、上記研究目的にそった形での内容を検討しつつ、作業を進めている。

(3)定本『七祖聖教』の編集については、大谷派では定本の依用本とすべき『七祖聖教』がないので、この御遠忌を機縁として定本となる聖教を編集する。底本は南条神興本(宗祖加点本の現存するものは、加点本による)とし、必要な校訂を施して、依用に便ならしめる。この事業は蓮如五百回忌を記念として編集するが、さらに宗祖の七百五十回忌をも展望しながら、当派の教学・学習の基本的聖教としたい。漢文テキスト(真宗聖教全書に相当するテキスト)・延べ書きテキストの2つのタイプのテキストを作成する予定であるが、現在漢文テキストの原稿を作成中である。

いま紹介した本研究プロジェクトの研究課題は、「現代における真宗の再興」である。蓮如上人の果たした歴史的な役割は、上人が「真宗再興の上人」と呼ばれるように、「真宗再興」ということである。この五百回忌は、現代の時代状況の中で、私たち一人ひとりが蓮如上人の果たされた仕事を再確認し、上人が見据えていたことを明らかにして、それを実践的に表現する大切な機会である。この研究プロジェクトによって、上人における学習・聞法・教化伝道にかかわる基礎となる視点と、資料が提供できれば幸いである。

蓮如上人五百回忌を迎えるにあたって、現在まで看過されてきた観のある蓮如上人の思想・人間像を改めて、再評価・再確認する機会に出遇えたことを感謝するとともに、責任の重さを痛感する次第である。

委託研究

真宗史料研究

—東本願寺近世近代史料の調査・

整理および目録作成—

研究員・チーフ 名畑 崇  
(日本仏教史学)

本研究は発足当初から東本願寺所管の園林文庫の史料整理とあわせ、近世近代の東本願寺関係文書の調査および翻刻をおこない、刊行のため原稿を作成してきた。

1996年度は研究計画に「園林文庫の史料調査整理」を掲げ作業を進めた。

1996年度『園林文庫』史料整理報告

「園林文庫」史料整理状況(全箱数182、全旧目録点数5312)

年度	箱数(達成率)	旧目録点数(達成率)	実際の点数	カード作成枚数
1991	21 (11.54%)	766 (14.52%)	783	4242
1992	21 (11.54%)	640 (12.05%)	678	4352
1993	13 ( 7.14%)	633 (11.92%)	626	3395
1994	22 (12.09%)	914 (17.21%)	1104	5961
1995	16 ( 8.79%)	614 (11.58%)	790	4297
1996	11 ( 6.04%)	395 ( 7.44%)	400	2943
計	102 (56.04%)	3962 (74.59%)	4381	25190

※「旧目録点数」は昭和28年調査時の点数  
「実際の点数」は今回調査時の大分類の点数

§園林文庫の史料整理作業の累積達成状況は、箱数にして全182箱中102箱(達成率56.04%)、旧目録点数にして全5,312点中3,962点(達成率74.59%)となった。箱数と旧目録点数の達成率の数字にひらきがあるのは、一箱中の文書数が多いものから優先的に処理されているためであり、全体的には旧目録点数の達成率が現状に近い数値であることから、全体としてはほぼ4分の3程度の処理を終えたこととなる。整理作業は、概ね順調に進行しているといつてよいであろう。

ただ、本年度のみの整理作業成果を見ると、箱数にして11箱(達成率6.04%)、旧目録点数にして395点(7.44%)、カード作成枚数は2,943枚で、過去最も数値の低かった1993年度よりも、さらに劣っていることがわかる。この反省を踏まえ、以下に今後の課題を述べておきたい。

まず大切なのはスタッフ確保の問題である。本作業は、近世近代の古文書整理という作業の性格上、鍛練された古文書読解力が必要であり、また大半が近世近代の宗門

史関係という史料の性質上、多くの歴史的・仏教的(真宗的)知識が不可欠である。さらに、非常に複雑な整理作業であることから幅広い経験が要求される。これらを兼ね備えたスタッフを確保することは容易なことではない。そのためには、計画的なスタッフの育成と、より長期的な優秀なスタッフの確保が、きわめて重要であろう。

つぎに、作業内容の改善による効率アップの問題である。カード作成については、これまでの大枠を崩すことなく、常に改善を心懸けている(カード記載項目の部分の変更など)。しかし、マニュアル化するにはイレギュラーな部分が多く、従来のように実際の作業による経験によらなければならないのが現状である。

最後に、作業収束に向けての問題である。先述のとおり、本作業も約4分の3の整理を終えて、今後は予測として3万枚以上にのぼることとなるであろうカードの整理と、カードにもとづくデータベース化、および目録編纂に向けた本格的な収束作業に取り掛からなければならない。例えば、カードの記載漏れや改定した記載内容の訂正、あるいはより効率よく検索するための内容分類選定などの問題である。これまでのカードとデータを、より効果的に利用し得るか否かは、これらを如何にまとめあげるのかという今後の問題にかかっていると見える。

§園林文庫整理カードコンピュータ入力状況について

整理カードの入力作業は従来の人力作業マニュアルに基づいて行っている。作業の基本的進行に関しては大きな問題はなく、マニュアルにあてはまらない事例に関しては基本的にはマニュアルに基づきつつ随時検討して対処することとしている。とはいえ、入力作業スタッフが卒業年度生で作業に重点的に時間を取ることができないことや、修士課程の学生であってもカリキュラムの変更に伴う授業時間の増大のため作業が前年度に比べて低調であることは否めない。

具体的作業マニュアルについて、近年データの共有化・通信ネットワークなどの問題が現実性を帯びてきたことから、本年度は学外団体(東京大学史料編纂所)のネットワーク構想(SHIPS)についての視察を行った。そこで、園林文庫の史料についても現在行っている作業(データベース化)が将来的には公のものとして活用されるべきであるならば、ここに問題が生じてくることが明らかとなった。その問題点の一つが画像データの不備である。

もう一つの問題点として、現在入力作業に利用しているデータベース・ソフトが旧来のものであり、検索等の応用作業に対する処理能力が乏しい点あげられる。この点に関しては、今後早い段階において新たな対策を講じる必要がある。

## 委託研究

## 西藏文献研究

—大谷大学所蔵の北京版大蔵經  
および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ 片野 道雄  
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。1996年度は、北京版西藏大蔵經の丹殊爾勘同目録の続刊の校正および原稿の作成、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの改良とそれを利用した西藏文献目録の電子版の作成を行った。

丹殊爾勘同目録に関しては、Ⅱ-2(諸經疏部・唯識部・阿毘達磨部を合わせたもの)の校正作業をしながら注記等の補足を行った。次のⅡ-3(律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雑部)の原稿が完成したので入稿した。このⅡ-3でもって丹殊爾勘同目録は完結することになる。甘殊爾勘同目録の完成後、1965年にこの丹殊爾勘同目録の編纂作業に着手してから三十年を越える年月が経過している。

三年前より開発を進めてきたパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh (TLK) は昨年度に完成し、オーストリアで開催された国際チベット学会 (International Association for Tibetan Studies) の第7回学術大会や本学で開催された第43回日本西藏学会学術大会において当該システムを紹介して希望者に無料で配付した。このシステムは、チベット文字による表示・印刷が可能だけでなく、チベット文字としてコード化されているため、そのデータはより汎用性の高いものとなっている。したがって、このシステムによって、チベット研究におけるパーソナル・コンピュータの利用環境は大いに整うことになった。その後、1996年度に入っても国の内外のチベット研究者やチベット語に関心を持った人々から当該システムを取得したいとの希望が寄せられたので配付を続けた結果、使用登録をした人は増えてきている。(1996年度末で登録者は約250名)

また、本研究は、当該チベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh を利用して目録の作製と文献

の入力を行い、本学所蔵のチベット語文献を電子データ化することを目指している。1996年度は、チベット語システムのテストを兼ねて昨年度より作製してきた大谷大学所蔵蔵外文献目録と金写版西藏大蔵經目録の電子化が一応終了したので、文献の入力に力を注いだ。入力する文献は、チベット仏教研究において最も基本的な文献の一つであり、しかも他の機関等で入力されていない『プトン仏教史』に決定した。このテキストは、第1章仏教入門、第2章インド仏教史、第3章チベット仏教史、第4章翻訳仏典目録、の4章からなっており、仏教史というよりも仏教概説書と呼ぶにふさわしいものである。このテキストの入力は1996年度末までに終了している。これにより『プトン仏教史』中の固有名詞や翻訳典籍名などの検索が非常に便利になると思われる。

## 委託研究

## 大蔵經学術用語研究

—『大正新脩大蔵經』經集部関係  
典籍における学術用語の研究—

研究員・チーフ 古田 和弘  
(仏教学)

本研究は、仏教典籍の一大叢書である『大正新脩大蔵經』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。『大正新脩大蔵經』は、今日漢訳された経理論を収録する大蔵經としてはもっとも整備されたものである。それ故、今日では何らかの形で仏教研究に携わるものにとっての標準として全世界の仏教研究者に利用されている。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや、目的の相違があり、『大正新脩大蔵經』は極めて多様に利用されている。それ故、東洋的な英知の結晶であり膨大な量と無尽の内容を含む大蔵經が幅広く多くの人々に利用できるようにするために様々な工夫が為されてきたのである。そしてその代表的なものが『大正新脩大蔵經索引』である。『大正新脩大蔵經索引』は、一応索引という名称を持つてはいるものの、一般にいう索引とは大いに内容を異にしている。一般の索引が本文の内容の検索のためであるのに対し、『大正新脩大蔵經索引』は、検索よりもむしろ内容の紹介に力が注がれているのである。本書の1、収録典籍解題 2、凡例 3、

音次索引 4、分類項目別索引 5、検字索引という構成がそれをよく表している。このような状況にあって本研究の意義を鑑みれば、世界的な視野では、大蔵経を普及していくための手だてをつくすことであり、当面の課題としては、『大正新脩大蔵経索引』の内容の再検討ということになるのである。

本研究は、1995年度から3年計画で始められたものであり、今年度はその第2年目にあたる。当面の課題としては、既に刊行されている『大正新脩大蔵経索引第9巻経集部下』の内容を吟味して、改正すべきところは改正して、改訂新版を出版することである。経集部収録の經典群は、内容的にきわめて多岐にわたり、現在の研究水準から見ても内容を明確に把握しにくい經典が多数収められている。これは大乘仏教の幅広さを物語る証拠として、特筆すべき点である。しかしながら、仏教研究はもともと個人的な関心を基盤として成立しているため、ここに収められる經典群が学会の表舞台で大いに議論の対象となっているといった状況はほとんど感じられない。それだけに大乘仏教の広大さを感じるきっかけとして経集部収録經典を改めて注目していくための材料を提供したいとの願いが本研究には込められているのである。そのための具体的な方法については既に昨年度の研究所報 (No.35) に報告したので、それを参照していただきたい。

3年計画の第2年目にあたる本年は、前年度に確認した研究計画に従って研究を進め、主として「収録典籍解題」「音次索引」の内容の検討を進めた。実際の作業内容はあまりにも細かい点にわたるためここでは省略したい。

次に、もう一方の大蔵経の普及という観点からの研究についてまとめておきたい。この点に関して進めている研究は2つある。第1に他の仏教系5大学と協力して基本典籍に関する入門用の解説書を出版することである。ここで改めて問題にするまでもないことであるが、学生の活字離れは著しい。そうした人たちに大蔵経に触れてもらうためには一体どうすればいいのか。まずわかりやすい解説書を作成しようという動機で、1994年度から始められたものである。専門用語を用いなくて仏教典籍の内容を伝えることが課題であったが、実際に検討を始めると我々が如何に専門用語を羅列しているかということがあからさまになり、非常に苦勞した。現代語を使って仏教が伝えられなくては、生きた仏教にはならないということを改めて確認した。そして本学の担当分は既に一応原稿が完成しており、他大学と歩調を合わせるために調整中である。

大蔵経を普及するための研究の第2点めは、大蔵経本

文のテキストデータベース化である。この点についても昨年度の研究所報 (No.35) に主な点については関説したので、本年度の進展について触れておきたい。大蔵経のテキストデータベース化は、現在わが国ではほぼ個人的な関心に従って様々なところで行われている。さらに韓国や台湾でも同種の作業が行われており、全体がどのような方向に向かっていくのか見通せないほどである。このような状況の中で当面は『大正新脩大蔵経』のデータベース化に協力し、応分の責任を果たしていこうというのが本研究の態度である。そこで、現在わが国におけるこうした作業の実質的な中心である東京大学インド哲学仏教学研究室と相談して、本学が今後作業を担当する典籍を具体的に決定した。それは大蔵経10巻分ほどに相当するが、その中の47巻と49巻所収の典籍のデータベース化を進めた。実際の作業は、スキャナーで読み込んだ画像をOCRソフトで読み込み、読み込んだテキストデータをワープロを使って整形した後印刷し、それに校正を加え、最後にテキストデータとして完成する、というものである。この一つ一つの作業の中にそれぞれハード的な面とソフト的な面での問題がある。その詳細はとてもここでは紹介できないので割愛するが、現在は具体的な作業に関する問題と同時に、こうした一連の作業の最終的な目標をどこに設けるかについて、文字の問題、表現形式の問題、現行の出版物としての『大正新脩大蔵経』との関係をどう理解すれば良いのかといった観点からの検討を進めている。

# 1996(平成8)年度「一般研究」研究結果概要

## 共同研究

### 近代における仏教研究の方法論 —近代の仏教研究における清沢満之 の地位と基礎資料の検討—

研究代表者 神戸 和麿  
(真宗学)

本研究は近代の仏教研究における清沢満之の地位を改めて確かめることを目的に昨年度から2年間の計画で進めてきた。ただ、実際の作業としては、基礎資料の検討にその大部分を費やしてきた。それは、これまで清沢研究の基本資料であった『清沢満之全集』全8巻(法蔵館)が絶版となっている今日、清沢研究のための基礎資料の公刊が内外から求められており、そのおし迫った課題である清沢の全集作成のための検討に時間をさいしたことによる。

この課題については、先に安富教授をチーフとした1993・1994年度の共同研究「近代における仏教の展開—清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の集成—」がある。そこにおいて、基本的資料収集が行われ、これまで公にされている資料に関しては、西村見暁編『清沢満之全集』との校訂が既に終えられている。その資料検討の結果、上記『全集』も基本資料として十全なものであるということとはできず、研究に耐える基礎資料作成の必要性が指摘されている。

この成果をうけて本研究では、これまでの清沢研究の基礎資料にさらに検討を加えていく作業を進めてきた。また公刊されていない資料については自筆原稿との対校が必要となるので、これについても昨年度に引き続き調査を進めた。特に清沢の自坊である愛知県碧南市の西方寺には直接足を運んだ。

また、久木幸男氏を招いての研究会も開催し、未公開資料について検討を加えた。その結果、これまでの全集には収められていない清沢自身の文章の所在も明らかになり、その収集を今後継続していく必要が確認された。

以上のように、本研究は清沢全集編纂のための資料の調査検討を中心として進めてきた。その中、清沢の論文で公刊されたものについてはすでに校訂作業を終えていたが、それを元にして学生にとって読みやすい基本テキ

ストの作成作業にも着手した。現在までに『精神界』所収論文、『教界時言』所収論文、について編集作業を進め、公にできる原稿の形にまで整理した。

## 共同研究

### 大谷大学図書館所蔵パーリ語 貝葉写本の文献的研究

研究代表者 吉元 信行  
(仏教学)

大谷大学図書館には、南方上座仏教の貝葉写本が多数蔵されており、我々研究員が中心となって長年目録出版の作業に携わってきたが、一昨年度末『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』(大谷大学図書館編、平成7(1995)年3月刊)として、詳細な目録が出版された。

本学所蔵貝葉は、目録作成のための現地調査によって、東南アジア地域で書写されたものであるが、現地では散逸しかけている貴重な文献群であることが判明した。先般、本学よりこの目録が内外の専門家や研究機関に寄贈されたが、さっそく多数の反響が寄せられており、研究にこの貝葉写本を活用しようとする学外の研究者からの問い合わせが寄せられ始めた。

ところで、この写本群は、入手経路も様々で、また、系統立てて蒐集されたものでもないため、学術的に資料的価値の高いものからそうでないものまで、玉石混淆であるといってもよい。中には、学界では切望されていないがまだ校訂出版されていない稀観写本や、出版されていても校訂が不完全で、本写本との校合により、さらなる学術的成果の期待される貴重な写本、あるいは、今まで学界に報告されたこともないような未知の写本もいくつか存在する。

そこで、今回の共同研究により、本学に所属・関係する我々が、本写本群の概要を明らかにし、特に重要と思われる資料を抽出して、これら稀観写本の研究に着手することになった。このことは、これら貴重な資料を蒐集した本学の先達の願いに応えることになると確信する次第である。

本学所蔵の貝葉写本には、(1)シャム王室より大谷光演

師に寄贈されたと伝えられるクメール文字・ビルマ文字・モン文字写本群と(2)入手経路不明のランナー文字・クメール文字写本群とがあるが、(2)の写本群はタイ北部の現地語が多く含まれて、現有スタッフでは研究が困難であることから、本研究では、(1)の写本群について、以下の役割分担に基づき、重点的に共同研究を進めた。

1) 研究代表者：吉元信行、貝葉写本の資料的分類研究、東南アジア仏教文化における貝葉写本の役割、クメール文字貝葉写本の律部、論部の研究。2) 研究員：長崎法潤（本学教授）、本学図書館所蔵貝葉写本将来経路の追跡的研究、クメール文字貝葉写本の経部の研究。3) 嘱託研究員：池田正隆（大阪外大講師）、ビルマにおける貝葉写本流布状況調査、ビルマ文字・モン文字貝葉写本の研究。4) 研究補助員：舟橋智哉（本学大学院博士課程）及び院生協力者数名、貝葉写本調査補助。

本年度の共同研究では、十数回の学内・学外での研究会や研究打合会を開催し、それによって次のような研究経過・成果及び次年度への課題を得た。

- 1) 目録作成段階では不明であった貝葉写本の将来経路の一部が明らかになった。
- 2) クメール、ビルマ、モン文字貝葉写本の *Phuuk* 毎の巻頭・巻末のローマナイズとそのワープロ入力（全体の半分を終了、後半は来年度に実施予定）。
- 3) 貝葉写本のテキストの中で、PTS 版等に校訂出版されているものについて、刊本からの逆引き索引作成作業。この索引によって、刊本の校訂が不完全である場合などで写本の参見が必要となった場合、本学貝葉写本の該当部分との照合が容易になる。この索引は、次年度に上記2)の作業による修正・補遺を加えた上、研究紀要(No. 16)に発表する予定である。
- 4) 重要な資料でありながら、まだローマ字校訂出版のなされていないテキストで、本学貝葉写本中にある『清浄道論註』（*Paramathamañjūsā*）及び、校訂出版されているが、本学写本との照合のなされていない『パーリ仏教教義集成』（*Sārasaṅgaha*）の一部校訂・照合を行った結果、その読解に本学貝葉写本が特に有用であることが判明した。
- 5) 東南アジア方面に流布しているジャータカの中で、“*Paññāsa-Jātaka*”という文献群があり、ビルマ方面所伝のものがPTSより、“*Zimme Paññāsa*”として校訂出版されている。本学の貝葉写本中にも“*Paññāsa-Jātaka*”があるが、それとは全く伝承の異なったタイ方面所伝のもので、ビルマ所伝には含まれていない稀観写本も存在する。このタイ所伝のジャータカはまだ校訂出版がなされていないので、本学貝葉写本が多くの研究課題を提供してくれることは確実である。

6) 上記諸調査の段階で、先般出版された『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』の記載で修正・補遺すべきところがいくつか判明した。その内の2・3の点は下記印度学仏教学会で報告したが、詳細は次年度に研究紀要(No. 16)にまとめて掲載する予定である。

7) 吉元・長崎・池田各研究員は北九州市「世界平和パゴダ」に調査のため出張した。同パゴダ所蔵の資料閲覧及びミャンマー政府仏教会派遣僧ウ・ヴィジャーナンダ大僧正より多くの知見を得た。

8) 97年3月に、池田研究員はミャンマーに調査に行き、本共同研究に多くの知見を提供した。特に、本学図書館に所蔵しないパーリ・テキスト刊本を将来、また、未刊行のパーリ・テキストの多数の写本コピーを将来した。次年度に整理予定。

以上の成果の中間報告を、吉元と長崎が日本印度学仏教学会学術大会において共同発表し、その要旨が同学会誌上に掲載された（吉元信行・長崎法潤「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本について」印度学仏教学研究45-2, pp.931-925.）。

残された問題点は、平成9（1997）年度継続研究において鋭意検討中であり、本年度の成果と合わせて、その詳細を研究紀要(No. 16)に報告する予定である。

## 共同研究

### 三朝高僧伝の比較研究

研究代表者 滋賀 高義  
(東洋仏教史)

梁の慧皎の『高僧伝』・唐の道宣の『続高僧伝』・宋の贊寧の『宋高僧伝』は、中国仏教伝来の初期から唐に至る間の高僧の伝記集である。これらの所謂三朝高僧伝は、従前仏教史上の正史として扱われ、その記載事項は史実の証明として利用されてきた。しかし近年の研究は一層確度の高い基礎資料、すなわち撰者が拠り所としたであろう碑文などの原資料を探求し、もって史実の確実性を高めようとする傾向にある。もっとも『高僧伝』・『続高僧伝』においてはそれらの基礎資料を著しく欠いており、ひとり『宋高僧伝』のみが相当豊富にそれらをこんにちに残している。そこで本研究は、第一次の作業とし

て賛寧が依拠した唐代高僧の碑文を精読して『宋高僧伝』の本文と比較し、原資料に対して史家賛寧がいかに対応したかを明らかにする。道宣は慧皎の『高僧伝』を意識して『統高僧伝』を著わし、賛寧は前出二者を意識して『宋高僧伝』を撰した。仏教史家賛寧の拠って立つ所以を明確するこの第一次作業を通して、『高僧伝』・『統高僧伝』の資料としての確度をあらためて確認しようとするのが、本研究の最終的な目的である。

平成八(1996)年度は如上の目的に沿って毎週木曜日四限目以降の時間を研究会に当て、原資料の精読に努めた。年間を通じて解説した碑文と撰者並びに輪読担当者は次の通りである。

「陝州弘農郡五張寺経藏碑」(庚信) 佐藤義寛

「元識阿闍梨盧墓碑」(張説) 島津京淳

「玉泉寺大通禪師碑銘并序」(張説) 河内昭円

「益州多宝寺道因法師碑文并序」(李巖) 大内文雄

「大照禪師塔銘」(李巖) 今場正美

「少林寺靈運禪師塔碑」(崔琪) 島津京淳

「大薦福寺大德道光禪師塔銘」(王維) 織田顕祐

「六祖能禪師碑銘」(王維) 松浦典弘

「大安国寺大德浄覚禪師塔銘」(王維) 浦山あゆみ

「曹溪第六祖賜諡大鑑禪師碑并序」(柳宗元) 若槻俊秀

「曹溪六祖大鑑禪師第二碑并序」(劉禹錫) 福井 敏

以上十一首、いずれも文章は難解であり、一週一回で読了したものはいくつも無い。なかでも「益州多宝寺道因法師碑文并序」と「大照禪師塔銘」との二首は難解のうえに長文であり、それぞれ四週連続して担当者に労を強いた。

「道因法師碑」について、賛寧はこれを採らず『宋高僧伝』に道因伝を立てない。賛寧がなにゆえに逸したかは興味のあるところであるが、同碑は原碑が現存し、書法のうえでもよく知られた貴重な資料である。全文にわたって注解を加えた作業は今までになく、おそらくは本研究会をもって最初とする。

膨大な量を持つ唐代の釈教文の中から限定された時間内に読破可能な碑文を選択するについては、おのずから一点に焦点を合わせた意図を必要とする。すでに提示した上記の碑文によって明らかのように、当該年度は禅宗五祖弘忍の後を承けた神秀と慧能、すなわち所謂北宗と南宗の關係に照準を合わせている。この期は『楞伽師資記』・『六祖壇經』が出現し南北対立の様相を強めた時代であった。大安国寺浄覚は『楞伽師資記』の撰者に擬せられた人物であり、「大照禪師塔銘」は北宗の祖神秀を嗣承した普寂の碑文である。一方、またこの期は天台智顛偽撰『浄土十疑論』が忽然と世に現われた時代でもあった。

荆溪湛然・華嚴澄観・圭峰宗密・慧能を承けた荷沢神会・南嶽懷讓・馬祖道一等等教団形成期に活躍した高僧に関わる碑文についてはまだ消化するにおよんでいない。さいわい研究の継続が認められた平成九年度においてはこれら未消化の資料読解に精励し、つねに賛寧の立場を視野に入れつつも各宗派成立の過程に十分な考察を加えたい。かくしてその成果は共同研究者各位の協力を得て一書となし、これを世に問うて本研究の目的の一部を達成し一応の締括りにしたいと念願している。

## 共同研究

### 書簡体の研究

研究代表者 荒井とみよ  
(国文学)

「書簡体の研究」は明確なテーマがあって始められた研究ではなかった。むしろ細分化された研究の枠組を超える方法の模索のために設定したテーマであった。

イギリス文学でサミュエル・リチャードソンの研究者である村瀬氏、ドイツ文学でゲーテやリルケの研究者である友田氏、フランス文学でルソーの研究者、並木氏の協力がえられたので、日本文学から村井氏の参加をえてプロジェクトを組むことができた。

「書簡体の研究」というとき、現実の書簡に比重をかける方法と、書簡体すなわちスタイルからアプローチする方法とでは、異なる面が生じるだろう。この研究班ではそこをあいまいにしたままでも出発した。整理することは大きな仕事であるが、テーマの模索のためには、テーブルを開放することに意味があるのではないかと考えた。

第一回研究会 1996・7・20

班員の研究現状の相互情報交換のための機会として、これまでの研究や関心の所在を自由に報告しあう。

村瀬氏の報告は、イギリスの書簡体小説の代表作である、サミュエル・リチャードソンの Pamela を中心に、イギリス文学の流れを概説しながら、その書簡体小説の意味を明らかにする方向でなされた。Pamela の問題が書簡体文学に共通することを確認できたことは、貴重で

あった。また Pamela がその後の文学に与えた影響と、書簡体小説がもつ特殊性、功罪ともいべきものが示された。

村井氏の報告は、梶井基次郎「Kの昇天」をめぐってされた。梶井には「椽の花」という書簡体小説もあるが、最初の作品集「檸檬」には作者自身がこれを入れなかった。習作としたのか、ともかく「Kの昇天」の方が完成度が高い。大正末期の探偵小説ブームと関係、森鷗外「興津弥五郎の生涯」との関係について想定できる仮説を紹介された。梶井の文学における「Kの昇天」の意味と大正時代の文学の考察に書簡体が果たす役割が問題として出た。

並木氏の報告は、「ルソーの書簡体作品について」というものであった。ルソー研究の現状の概略が報告され、ルソーの著作の中で書簡体が占める比重の大きさは彼の思想の特殊性と結びついていること、すなわち書簡による「告白」的スタイルは、実生活体験を基盤にした直観から構築される思想を表現するのに適したものであるということであった。矛盾の思想家といわれるが、書簡体というのは矛盾を矛盾のまま提示できる形式であるという論点が提示された。

荒井の報告は樋口一葉の「通俗書簡文」についてであった。明治29年に刊行された一葉生前の唯一のこの著書は、現在のところ研究はないに等しい。この機会に日本近代文学の夜明けに位置する作品を解明することで、日本の近代散文文体の成立の諸要素が明らかにならないかという問題提起をした。

友田氏にコメントをいただき、自由に意見交換を行なって問題点の整理を試みた。

班員の他にオブザーバーとして宗晴美・北城伸子（大学院生）が参加した。

第二回研究会 1996・12・13

「ドイツにおける書簡文化と女性の書簡」

講師・渡邊洋子氏（大阪学院大学）

出席者、友田孝興 並木治 村井英雄 村瀬順子 荒井とみよ 竹村はるみ 名倉弓子 宗晴美 北城伸子

ほぼ一世紀にわたるドイツの書簡文学の時代を、具体的な作品を紹介しながらの報告であった。啓蒙主義、感傷主義、古典主義、ロマン派などの文学潮流もこれにあわせて理解できる方法をとっての分析であったので、イギリス・フランス・日本の場合との比較を刺戟するものであった。

議論点・①英、仏で書簡体から近代小説へ向かうのと、独では別経路をとったことの意味について。精神性の相違、時代的ずれの相違。②〔自然／芸術〕〔公／私〕

〔男／女〕などの対立概念が日本明治期に共通する意味について。書簡体の普遍性と特殊性について。③虚偽に対する道義的批判の時代性あるいは国民性について。④啓蒙主義と学校教育の関係について。⑤「感傷」という言葉のもつイメージについて。⑥女性の文学活動と書簡の関係について。

第三回研究会 1997・1・18

「近世文人の書簡」

講師・水田紀久氏（本学非常勤講師）

出席者、並木治 村井英雄 村瀬順子 竹村はるみ 宗晴美 北城伸子

芭蕉自筆本「奥の細道」をめぐって、江戸時代文人の書簡について、西鶴「万の文反古」についてという三点にわたっての報告であった。話題は縦横無尽という感じで、持参いただいた復刻本や掛け軸は参考資料のプリントとともに、書簡体研究の初歩的な知識として享受した。書簡の実相性と物語性について、書簡文解釈の多様な可能性について議論があった。

議論点・①女性史における三行半の意味について。②樋口一葉『通俗書簡文』と『万の文反古』の関係について。③書簡の実用性と物語性について。④書簡の解釈の多様な可能性、フィクションとドキュメントの間。

## 個人研究

### シロイヌナズナにおける キメラ植物の創出

研究代表者 加藤 尚子  
(分子生物学)

近年シロイヌナズナを用いた植物の遺伝子発想や、形態形成の研究が盛んに行われるようになってきている。これは長年にわたって多くのシロイヌナズナの突然変異体が分離されており、それらの種を世界中の研究者に無料で配布する機構ができたことによることも大きい。植物体が小さく栽培が容易でライフサイクルも短いといった特徴が実験材料として有利であることにもよっている。このシロイヌナズナを用いてキメラ植物を作ることを試みた。キメラ植物というのは一つの植物体が遺伝的に異なっている二つの植物の細胞が混じりあってできている



ものをいう。動物ではマウスやショウジョウバエなどで発生途中の胚に別の遺伝的に異なった胚の細胞を入れてキメラをつくることに成功している。植物でも、接ぎ木をしてから接ぎ木したところを切断すると新たに形成された生長点が両方の植物の細胞が混ざり合ったものになることが報告されている。

キメラ植物を調べることにより、できた器官がどのような経過を経て作り出されてきたのかが類推できる。生物の体は細胞を単位にしてつくられている。細胞がどのように配置するかが生物の体の構造を決めている。植物の場合は、細胞のまわりに細胞壁を持ち細胞を固めて細胞同志も堅くつながり合っているの、構造を再編成することが比較的困難であると考えられている。すなわち植物が植物体を形作っていく過程は、細胞の積み重ねによって決まるので細胞のどの面で細胞分裂が起こるかによって植物の形が決まる(積み重ね方式)。しかしながら、シロイヌナズナの根の細胞をレーザーで殺したところその付近の細胞が自分のなるべき運命を変えてその殺された細胞の代わりをしたことが報告されている。すなわち植物の形態形成は細胞がどの位置にあるかによって決まっているがその位置にいる細胞の運命はかなり可塑性があり、それは細胞間のコミュニケーションによっていることがわかる。動物の場合は、細胞分裂により生じた細胞はその場を自由に移動して構造形成が行われる。あるいは細胞分裂しながら細胞どうしの関わりの中で形態形成がおこる(形態形成運動)。この動物と植物の形態形成の違いは植物が動かずに地中に根を延ばして光を求めて地上に茎を伸ばす生活様式をとっているために細胞を固く固めて植物体全体の構造を動かさないように固定しなければならないためである。反対に動物は食物を求めて動かなければならないので動く体をつくるためには、かなり複雑な構造をつくらなければならなかったのである。そのためには単位の細胞自体が自由に動いて形をつくる能力が必要であったと考えられる。

植物のからだがどのように作られるかを調べるためには、細胞がどのように分裂して細胞が配置したかを知らねばならない。この過程は遺伝的に決まっているはずである。シロイヌナズナの突然変異体の中には、形が変化したものが多く分離されている。植物体全体の大きさが非常に小さくなったもの(野性型の背の高さが約30cmあるのに対して5cm程にしかならない)や、花卉ががくに変わったものなどの花の形が変化したもの、葉の形が丸く変化したものなど、その他多くの変異が知られている。これらの変異にかかわる遺伝子も単離され、その働きも少し明らかになりつつある。

本研究はこれらの形態が変異した突然変異体と野性

型、あるいは別の変異体と組み合わせてキメラ植物体を再形成し、遺伝的に異なった細胞間ではどのような形になるのかを見るのを当面の目標にした。そのためにはっきりした形態の変化や、細胞の区別をつけなければならない。キメラになっていることを示す指標として、一方の細胞をアルビノ(白子)にしてもう一方の緑の細胞と混ぜると、キメラになっていればモザイクになるはずである。これを指標にして2種の細胞のキメラ植物を再構成することを試みた。実験方法は次のようである。

- 1) シロイヌナズナの胚軸を植物ホルモンによりカルスを誘導し、そのカルスどうしを混ぜる。一つ目は、胚軸どうしを接触してできたカルスが接するようにして両方のカルス細胞の結合を計る。
- 2) 液体培養でカルスを作り、2つのカルスを混ぜる。
- 3) 液体培養のカルスから単細胞を単離し、単細胞どうしで混ぜる。

以上3つの方法でキメラ植物の再形成を試みた。1)の方法では2種のカルスが混じり合うことがかなり難しいことがわかった。2つの胚軸の接し方や、ホルモン濃度を変えてみる必要があるかもしれない。2)と3)の場合、いつも実験に使えるようにカルスの継代培養を確立することがまず必要である。カルスの継代培養を使って2つのカルス細胞を混ぜてのち、再形成した植物を調べたいと思っている。現在のところカルスの継代培養の条件を検討している段階でカルス細胞を混ぜ合わすところまではいたっていない。今後以上に述べた実験計画に乗っ取って研究を行っていきたいと思っている。

## 個人研究

# 神統流に関する研究 —伝承過程並びに泳法の の解明に関わって—

研究代表者 中森 一郎  
(体育学)

我が国に伝承されてきた泳法流派にとって泳法技術は、流派の精神と二分する伝承の主体である。しかし、殊伝承の継続性ということから考えるならば、泳法技術が伝書・文書上の泳法だけではなく実践されるべき具体的な泳法技術の存在が必要不可欠と捉えられることは自明の理である。

神統流においては、第十六代宗家故黒田清光氏によって同流の復興が果たされ、世に公開されてきたが、この宗家から次世代の後継者へ、すべての同流泳法技術や解釈等が伝授されないまま昭和54年5月20日に、宗家の逝去を迎えるに至ってしまった。神統流が元来持つ用語や泳法の変化形態の特異且難解さは、宗家の逝去後、文章や資料が残されてはいたものの泳法の全貌と解釈に至っては、後継者にとってかなりの労力と新たな判断を要する事態となってしまった。

このような事態にある神統流にとって、伝承過程が明らかとなることも重要な課題であるが、具体的に神統流の泳法を解明し公開していくことが、眼前に置かれた流の存命をかけた大きな課題である。

この泳法の解明を行う作業は、本来流派の内部でのみ行われるもので、門外漢が口を差し挟むことなど全く許されることではない。

しかしながら、中森が平成2年以来神統流の史的調査を行ってきた関係から、先代宗家故黒田清光の子息黒田清定氏と同甥にあたる黒田清恒氏と中森との謂わば共同作業として泳法の解明を進めることが許された。

作業の手始めとしては、中森が先代宗家が残した文献資料を中心に、泳法に関わる記述を拾い出すことになった。

その結果、次の文献・資料から、泳法を解明する手がかりが得られると判断した。

①黒田清光著『薩州伝来 潮手繰方神統流梗概』昭和10年、②黒田清光著『薩州伝来 潮手繰方神統流要抄解説』昭和29年、③「瀬尾謙一の神統流泳法に関するメモ」(昭和37年8月天理プールにて行われた日本泳法大会にて黒田清光に神統流泳法に関する質問を瀬尾謙一がしたことの内容が見られるもの)、④黒田清光著「日本で最古の伝統を持つ神統流水迫仙法」(『さんざし』昭和38年5月号)、⑤黒田清光著「神統流水迫仙法の解説」(『さんざし』昭和38年10月号)、⑥「黒田清光ノート」(昭和41年頃の記述と思われる)、⑦黒田清光著『薩摩の神統流公開演技解説書』昭和42年(黒田家蔵で、文章空欄箇所に黒田清光による公開演技者名や泳法の解説等の付記が見られるもの)、⑧黒田清範抜粋解説『薩摩伝統泳法神統流』昭和54年

以上の文献資料に記述された泳法は、年次を追って変化してきていることが見られた。しかし、ここに示された変化は、恐らく以前のものを単なる誤りとして訂正するのではなく、寧ろ黒田清光が神統流の復興以来繰り返してきた伝書の解釈における試行錯誤の結果、解釈が進化したことを意味すると考えた。

その意味からは、上記文献資料の①を基本文献と定め、

⑦及び一部⑧を集結的表現と考えることで、ある程度文献上での目安をつけることができた。

具体的には神統流の基本「業三品」である「差の業」・「抜の業」・「捨の業(浮・潜)」の変化「正・奇・要・変」のそれぞれの泳法に対する基本理念・泳ぎ方・脚捌き・手捌きを文献資料から抜き出し、出典分別の上並べたことで、神統流後継者及び伝承者が過去に経験したり修得してきた泳法から具体的泳法を想定することのできる段階に達した。

神統流の泳法の解明作業としては、この文献資料からの泳法をより具体的に明らかにするために次のことを実施した。

③神統流の後継者及び伝承者を召集して先代宗家の泳ぎや自身が修得した泳ぎを回想しての該当泳法の検討、④残存泳法写真を参考としての検討、⑤神統流関係者を召集して実際にプールにて泳ぎながらの検討、④黒田清定氏・黒田清恒氏の同意が得られて決定した泳法のVTR収録、⑤決定した泳法については黒田清定氏・黒田清恒氏を中心としてVTR収録の映像を見ながらの再検討、⑥再検討後に決定した泳法の泳法解説と図解を試行、⑦「原案」の作成

研究期間において、実際に鹿児島市に赴いて調査を行った日程は、1996年8月28日～31日、10月10日～13日、1997年3月8日～12日で、加えて書信及び電話での交信も行った。また、この間に、泳法を考える上でのアドバイザーとして日本水泳連盟日本泳法委員である岩下聆氏の協力を得、泳法モデル兼VTR収録補助として日本泳法大会シニア泳法競技で優勝経験を持つ岡嶋一博氏に、鹿児島への同行を仰いだ。

以上で、神統流泳法の解明においては、ほぼ所期の目的を達成したと言える。しかし、今回の研究期間中では、伝承過程に関する史的調査を行う時間的余裕がほとんどなく進展することができなかった。

## 個人研究

ジャック・ラカンにおける  
“愛”と“欲望”の理論の研究研究代表者 番場 寛  
(フランス語・フランス文学)

計画に基づきどのように研究を進めたかを、幾つかの発表の機会ごとにまとめると以下ようになる。

1 ラカン理論におけるファルス (1996年6月2日、日本フランス語フランス文学会春季大会、早稲田大学にて発表)

ラカン理論においてファルス (phallus) が問題となるのは、ファルスが性差を示す決定的な目印となるものでありながら、それは男性の生殖器官をさすのではなく、シニフィアン (記号の表現的側面) であるからである。「父性陰喩」の定式で示される「母親の欲望」の対象とは、母親に欠如していると子に認識され、自らがその欠如に置き換わり、その欠如を埋めたいと子が願うような、想像の対象であり、それが「想像的ファルス」である。しかし「父—の一名」と呼ばれる象徴的父の出現により、自分が母のファルスになることを断念させられ、以後は自らがファルスを持つようになるというのである。このようにラカンの唱える「去勢」とは決して、現実的な器官を対象とするのではなく、「想像的な対象」であること (être) を断念するよう「象徴的」になされるのであり、それにより、今度は自らがファルスを持つこと (avoir) ができるようになる、その前提となる条件なのである。

こうしたラカンの理論が彼の『ハムレット論』や、『セミナー第八巻』ではどのように展開されているかを示し、常に「欠如」ということ、「欠如」が現れ、その「欠如」が機能するという点にラカン理論におけるファルスの本質があるという結論を出した。

2 ラカンのコロック (研究討議会) 参加と国立図書館を中心とした資料収集のためのフランスへの渡航

7月19日にフランスに渡り、7月20日より30日までのコロックに参加した。コロックはノルマンディー地方のスリジー・ラ・サルという村の城に泊りがけで行われた。参加者の延べ人数は74名だが、常時30名から40名くらいの人数で行われ、少数のベルギー人、アメリカ人、

ドイツ人、イギリス人、日本人、の他は参加者の殆どはフランス人であった。午前と午後各一回づつ一時間から一時間半ほどの研究発表とその後、休憩時間をはさんで同じくらいの長さの質疑応答が交された。

コロックを中心となって企画したルネ・マジョールが最後に明言したが、コロックの題、Depuis Lacan の Depuis には時間的な意味としての、「ラカン以後」、「ラカンから」と言う意味と、空間的な意味、「ラカンによれば」という意味の二重性を含んでおり、発表のテーマもこの二重性を具現した多彩なものとなっていた。それはそのままラカンが今日なぜこれほどまでに世界の思想界で注目されているのかを説明していると思われる。臨床面では、ラカン以後、「エディプス・コンプレックス」をどのように捉えるべきかと言う問題でフロイトをどのように読み直すかが問われていた。女性の発表者からはラカンのファルス主義に対する批判めいた発言があり、ラカンを読む側の性差を感じさせられたのは興味深かった。発表のもう一つのテーマは言語や翻訳やレトリックを問題にしたものであり、それを具体的な文学作品の分析の中で行った発表もあった。圧巻は、ギリシア悲劇の「アンチゴーネ」を取り上げ、ソフォクレス、ハイデッカー、ラカンと連なる、「翻訳」の問題、「倫理」の問題を追求した発表であった。

ルネ・マジョールが「ラカン以後デリダの精神分析は可能だろうか?」と問いかけたように、テーマの多彩さにも関わらず、発表の背後にある共通点が浮かび上がっていた。それは発言者の言葉の中に何回となく出てきた、ジャック・デリダの影響である。

3 J=D・ナシオ博士公開講演会 (1996年12月24日、於大谷大学)

J. ラカンの弟子の一人であり、「バリ精神分析学セミナー」を主催し、また自分の診療所で精神分析による治療に携わるかたわら、バリ第7大学でもフロイト、ラカン理論の教授に努めている J=D・ナシオ博士が来日した折、本学にお招きし、講演をお願いした。演題は「フランスにおける精神分析の現状—フランス文化におけるジャック・ラカンの占める位置—」で、難解さのゆえに敬遠されたり、とかく誤解されがちなラカンの思想を専門でない聴衆を対象に分かり易く説明していただいた。フロイトからラカンに至る過程において、精神分析が人間の無意識といったものをいかに捉え、それをシニフィアンという概念を使いながらどのように、「自我」を解き明かしたのかをラカンの「想像界」「象徴界」「現実界」といった基本概念と合わせて説明していただいた。遠方よりの学外参加者を含む、60名近くの聴衆の中からは熱心な質問が寄せられた。

個人研究

『往生要集』の研究

研究代表者 Robert F. Rhodes  
(仏教学)

恵心僧都源信(942-1017)によって著された『往生要集』は日本浄土教の基礎を作った論書として、日本宗教史のなかで最も注目されるべき書物のひとつである。近年欧米においても、平安時代中期の宗教界の動向(たとえば空也などの聖の活動)について考察を試みようとする若い研究者が増えている。しかし残念なことに、当時の浄土教思想を代表する『往生要集』についての研究は、欧米諸国ではあまり進められていない。特にバーモント大学のAllan Andrews教授が1973年にThe Teachings Essential for Rebirth: A Study of Genshin's Ojoyoshuを発表されて以来、殆ど取り上げられていない。このような状況のもとに、私は『往生要集』の思想を欧米により詳しく紹介する必要を感じて、『往生要集』の念仏思想をテーマとして、昨年研究をおこなった。

この個人研究プロジェクトでは、『往生要集』研究の第一のステップとして、この書物に見られる源信の地獄観と念仏観をとりあげ、それらについてを英文でまとめることとした。以下、この研究成果について簡単に報告する。

(1)『往生要集』の地獄観。当初、『往生要集』のなかで地獄を描写した部分(具体的には大門第一「厭離穢土」の最初の部分)を英訳する計画であった。この箇所では八大地獄が詳しく説かれ、各々の地獄に落ちた衆生が受ける苦しみが生々しく画かれている。しかしここで見られる源信の記述を、その基にある經典論書と照らし合わせてみると、源信は単に従来の地獄観を継承したのではなく、様々な地獄についての見解を独自の立場から再構成したことが確認された。そこで、英訳作業にさきだち、まず最初に源信がその地獄観をいかに構築していったかを検討することにした。具体的にいうと『往生要集』のなかに見られる等活地獄(八大地獄の最初の地獄)の記述を取り上げ、その基礎となる『大智度論』、『瑜伽師地論』、『諸経要集』などの該当箇所と比較した。その結果、『大智度論』、『瑜伽師地論』、『諸経要集』は

それぞれ異なった形で等活地獄を描写しているが、源信はこれらの相矛盾する描写から、うまく取捨選択し、独自の総合的な等活地獄観を構成していることが明らかになった。伝統を重んじながら、それにとらわれない源信の態度がここによく現されているように思える。

(2)『往生要集』の念仏観。周知の通り、源信は『往生要集』のなかで世親の『浄土論』により、念仏を五念門(礼拝門、讃嘆門、作願門、観察門、回向門)の組織をもって説明している。本研究では、これらの五念門の解説に従って、主要な部分を英訳する形で、源信の念仏観を考察した。なお、源信の念仏観についての研究成果の一部はすでに『大谷大学研究年報』50号に英文で発表した。

# 真宗総合研究所彙報 1997.4-1998.3

## ■研究所委員会

- 5月7日(水) 12:10～ 博綜館5階第3会議室  
議 題 ①1997年度客員研究員・特別研究員について  
②その他
- 7月30日(水) 13:00～ 博綜館5階第3会議室  
議 題 ①研究事業の追加について  
②その他
- 10月20日(月) 17:50～ 博綜館5階第3会議室  
議 題 ①本年度の研究の進捗状況について  
②その他
- 11月19日(水) 17:30～ 尋源館2階会議室  
議 題 ①1998年度の「一般研究」選考について  
②客員研究員について  
③その他
- 3月30日(月) 13:00～ 博綜館5階第3会議室  
議 題 ①1998年度「指定研究」について  
②その他

## ■「指定研究」研究会

### 国際仏教研究

- \* 曾我量深の翻訳に向けて (1)～(10)  
講 師 Jan Van Bragt 氏 (南山大学名誉教授)  
(1) 4月24日(木) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(2) 5月22日(木) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(3) 6月5日(木) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(4) 9月18日(木) 18:00～ 博綜館5階第4会議室  
(5) 10月30日(木) 18:00～ 博綜館5階第4会議室  
(6) 11月20日(木) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(7) 12月18日(木) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(8) 1月22日(木) 18:00～ 博綜館5階第1研究室分室1  
(9) 2月26日(木) 18:00～ 尋源館2階会議室  
(10) 3月19日(木)～20日(金) 和敬精舎
- \* 安田理深「名は単に名にあらず」翻訳検討会  
講 師 Paul Watt 氏 (デュポール大学教授)  
(1) 6月9日(月) 18:00～ 博綜館5階第5会議室  
(2) 6月17日(火) 18:00～ 博綜館5階第5会議室
- \* 清沢満之の翻訳に向けて  
講 師 Mark Blum 氏 (フロリダアトランティック大学教授)  
(1) 7月10日(木) 16:30～ 博綜館5階第5会議室  
(2) 3月17日(火) 16:30～ 博綜館5階第5会議室
- \* カナダにおける仏教研究の現況  
講 師 A. W. Barber 氏 (カルガリー大学助教授)  
7月1日(火) 12:30～ 博綜館5階第3会議室
- \* ドイツ語による真宗の概説書の作成に向けて

講 師 Volker Zotz 氏 (本研究所客員研究員)

11月13日(木) 16:10～ 博綜館5階第5会議室

## ■「一般研究」研究会

[共同研究吉元班]

大谷大学図書館所蔵パリー語貝葉写本の文献的研究

\* インド・東南アジアに伝わる羽衣説話

—スダナとマノーハラー—

講 師 田辺 和子氏 (東方研究会研究員)

11月18日(火) 16:10～ 1号館1110教室

## ■学会参加

### 大学史編纂研究

<全国大学史資料協議会>

\* 西日本部会・1997年度総会第1回研究会

5月23日(金) 14:00～19:00

会 場: 龍谷大学

参加者: 宮崎 健司 (研究員)

\* 1997年度総会ならびに全国研究会

10月13日(月)～15日(水)

会 場: 東北大学 (13日・14日)

東北学院大学 (15日)

参加者: 武田 武麿 (研究員)

宮崎 健司 (研究員)

御手洗隆明 (研究補助員)

\* 西日本部会実務指導会

10月18日(金)

会 場: 桃山学院

参加者: 御手洗隆明 (研究補助員)

\* 西日本部会研究会

12月9日(火)

会 場: 堺市博物館

参加者: 御手洗隆明 (研究補助員)

狭間 芳樹 (研究補助員)

\* 第10回東日本部会研究部会

3月26日(木)

会 場: 早稲田大学

参加者: 御手洗隆明 (研究補助員)

### 国際仏教研究

\* 学会名 35th ICANAS

(International Congress of Asian and North African Studies)

期 間 7月7日(月)～12日(土)

開催地 ハンガリー・ブタペスト

参加者 宮下 晴輝 (研究員)

要 務 学会参加ならびに資料収集調査

\*学会名 国際真宗学会第8回大会  
期 間 7月24日(木)～28日(月)  
開催地 カナダ・カルガリー大学  
参加者 加来 雄之(研究員)  
樋口 章信(研究員)

要 務 学会参加ならびに資料収集調査

\*学会名 AAR:アメリカ宗教学会  
(The American Academy of Religions)  
期 間 11月22日(土)～25日(火)  
開催地 U.S.A. サンフランシスコ  
参加者 Robert F. Rhodes(研究員)  
要 務 学会参加ならびに資料収集調査  
\*学会名 第3回国際ダルマキルティ学会  
期 間 11月4日(火)～6日(木)  
開催地 広島 広島国際会議場  
参加者 山本 和彦(研究補助員)  
要 務 学会参加

■出張/調査派遣

「指定研究」蓮如研究

\*期 日 9月11日(木)  
出張先 三重県 真宗高田派本山専修寺宗務院  
出張者 友田 孝興(所長)  
白井 元成(研究員)  
要 務 真宗高田派所蔵善導五部九巻高田専修寺本  
原本閲覧打ち合わせ

「指定研究」西藏文献研究

\*期 間 5月21日(水)・22日(木)  
出張先 東京 東洋文庫  
出張者 三宅伸一郎(研究補助員)  
要 務 Tibetan Language Kit ヴァージョンアップ  
打ち合わせ  
\*期 間 3月5日(木)～8日(日)  
出張先 U.S.A. サンフランシスコ  
出張者 今枝 由郎(嘱託研究員)  
要 務 アップル本社とのチベット語システム  
ヴァージョンアップの打ち合わせと資料収集  
\*期 間 3月11日(水)～13日(金)  
出張先 東京 東洋文庫(11日)  
仙台 東北工業大学(12日)  
出張者 兵藤 一夫(研究員)  
三宅伸一郎(研究補助員)  
櫻井 智浩(研究補助員)

「指定研究」大蔵経学術用語研究

\*期 間 5月9日(金)・10日(土)  
出張先 東京 駒沢大学  
出張者 古田 和弘(研究員)  
木村 宣彰(研究員)  
要 務 大蔵経学術用語研究会理事会出席

「一般研究」[共同研究ワデル班]

\*期 間 4月23日(水)～5月7日(水)  
出張先 U.S.A. (フィラデルフィア、オークランド、  
ニューハンプシャー、カリフォルニア)  
出張者 Norman Alan Waddell(研究員)  
要 務 プライス氏関係者へのインタビュー調査及び資料収集  
\*期 間 11月27日(木)～29日(土)  
出張先 鎌倉、東京  
出張者 Norman Alan Waddell(研究員)  
多田 稔(研究員)  
要 務 プライス氏の資料閲覧及び関係者へのインタビュー

\*期 間 3月11日(水)～15日(日)  
出張先 鎌倉、東京、大磯  
出張者 多田 稔(研究員)  
要 務 プライス氏の遺族訪問及び文献資料の収集  
\*期 間 3月16日(月)～22日(日)  
出張先 U.S.A. (フィラデルフィア、オークランド、  
ニューハンプシャー、カリフォルニア)

出張者 Norman Alan Waddell(研究員)  
要 務 プライス氏令嬢へのインタビュー及び資料収集

「一般研究」[共同研究小野班]

\*期 間 6月6日(金)・7日(土)  
出張先 愛知県 西方寺(清沢満之自坊)  
愛知県立図書館  
出張者 名畑直日児(研究補助員)  
白石 祐人(アルバイト)  
要 務 「清沢満之に学ぶ全国集会」参加及び資料調査  
\*期 間 3月11日(水)・12日(木)  
出張先 愛知県 西方寺(清沢満之自坊)  
出張者 一楽 真(研究員)  
木越 康(研究員)  
名畑直日児(研究補助員)  
要 務 西方寺の資料調査  
\*期 間 3月26日(木)～28日(土)  
出張先 愛知県 西方寺(清沢満之自坊)  
出張者 名畑直日児(研究補助員)  
鶴見 晃(アルバイト)  
野中 義文(アルバイト)  
要 務 西方寺の資料調査

## 「一般研究」[共同研究吉元班]

- \*期間 11月13日(木)  
出張先 名古屋市 愛知学院大学  
出張者 池田 正隆(嘱託研究員)  
要務 パーリ語仏教文化学会講演会出席

- \*期間 12月25日(木)  
出張先 名古屋市 覚王山日泰寺  
出張者 吉元 信行(研究員)  
長崎 法潤(研究員)  
池田 正隆(嘱託研究員)  
舟橋 智哉(研究補助員)

要務 覚王山日泰寺見学・仏舎利関係資料閲覧

## 「一般研究」[個人研究沙加戸班]

- \*期間 1月31日(土)～2月2日(月)  
出張先 東京大学、早稲田大学及び日比谷図書館等  
東京都内各図書館  
出張者 沙加戸 弘(研究員)  
要務 図書館調査及び資料の書誌的研究

## ■研究所関係出版物の紹介

*Popular Buddhism in Japan : Shin Buddhist Religion and Culture* by Esben Andreasen  
Japan Library, 1998 199 pages.

1992年に大谷大学真宗総合研究所で、特別研究員として滞在されたエスベン・アンドレアッセン氏が、この度、その研究成果を出版されました。近年、親鸞、真宗についての著作はいくつか出版されていますが、本書は現代の真宗、とくに真宗大谷派にスポットを当てたユニークなものです。

内容は、イントロダクションと、(1)宗祖親鸞(2)現代の真宗(3)同朋会運動(4)真宗の文化(5)東本願寺の儀式(6)真宗の葬送儀礼(7)真宗の教育(8)ハワイ開教の8章からなっています。

ハワイ大学の名誉教授であり、本研究所の国際仏教研究班の嘱託研究員であるアルフレッド・ブルーム博士は、「この著作においてアンドレアッセン氏は、私達の真宗の信仰についての知識に大きな貢献を果たした。それは、真宗の信仰について、真宗の草創期の諸文書、近代的な解釈の諸例、そして文化的、宗教的そして教団的生活をあらわす代表的な諸文のような、真宗の伝統について異なった次元からの見方を提供するさまざまな資料を集めることによってなされたのである。…この著作は、真宗という日本仏教の重要な流れについてより深い研究を可能にするであろう。」(本書の Foreword より抜粋)と紹介しておられます。

## 滋賀高義篇

『唐代釈教文選訳注』

朋友書店、1998年  
335頁、8,000円

本「所報」16頁において報告されているように、本研究一般研究の滋賀高義教授を代表とする共同研究「三朝高僧伝の比較研究」班の成果が上記のように出版されました。

唐代の釈教文十五首が収められ、それぞれの文について解題、本文、校異、訓読、語釈、語釈索引と付録の人名索引、寺名索引からなっています。本書出版の意義を、研究員の一人でもあった竺沙雅章教授は、「われわれの研究では、これまで釈教文のうち仏僧の塔銘、碑文の類を選読してきた。本報告に収めるものは、そのうちの十五篇、主に盛唐に活躍した禅僧の伝記資料であり、従来もよく利用されてきたものであるが、多くは長文のために、その一部分が引用されるだけで、全文が通釈されることは少なかった。われわれが釈教文を共同研究に取り上げ、このようなかたちで公刊する所以は、実にこの点にある。」(『唐代釈教文のテキストについて』より抜粋)と述べられています。

研 究 所 報 第 36 号

1998年9月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒602-0802 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町8番地

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501